『赤毛のアン』の魅力を探る

佐　藤　義　隆
文化創造学部文化創造学科
（2009年９月25日受理）

Investigating the Enchantments of *Anne of Green Gables*

Development of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan（〒501－2592）

SATO Yoshitaka
（Received September 25, 2009）

１．はじめに（探求の動機と構成について）

2008年は，『赤毛のアン』出版100周年記念の年だったため，いろいろな方面で『赤毛のアン』関係の行事が行われました。NHK テレビでは，４月から「３カ月トピック英会話」として，「『赤毛のアン』への旅」が放送されました。モンゴメリ研究の第一人者松本侑子氏が講師をされ，「『赤毛のアン』は私の“心の本”」という松坂慶子さんが生徒役という贅沢な番組で，私も楽しく拝見させて頂きました。

私も，2008年はそうした記念すべき年なので，この機会に学生達にも『赤毛のアン』の魅力を伝えたく思い，私の本務校の岐阜女子大学の授業で取り上げました。すると，大学のホームページでそのことを知って下さった岐阜 NHK 文化センターさんから，2009年の４月から『赤毛のアン』の講座を担当してほしいという依頼があり，そのテキスト作りを通して私は更に『赤毛のアン』の魅力を探る機会を与えて頂くことになりました。

『赤毛のアン』ファンは本当に多く，女優の檀ふみさんは100回以上読んだと言っておられます。アンは11歳でマリラとマシューの家にやってきますが，檀さんもちょうど11歳の時に初めて読み，以来，その時に沸き起こった感情を思い出したくなると再読されるそうです。また，脳科学者の茂木健一郎氏も小学校５年生の時に初めて読み，高校の時には原書で読んで英語が得意になったそうです。また，茂木氏は，「バターカップス」という『赤毛のアン』ファンクラブにも入っておられます。

『赤毛のアン』の奥深さを探求しておられる松本侑子氏は，御著書『赤毛のアンへの旅』の後書きで，『赤毛のアン』の素晴らしさを箇条書きで次のように書いておられます。①アンの独特で魅惑的な個性，②そそっかしくておしゃべりな女の子が賢明で愛情深い娘へ育っていくすがすがしい成長の軌跡，③マシューの朴訥な人柄，④マリラの母性の目覚めと人間的な成熟，⑤中年を過ぎたマシューとマリラが新しい幸福をつかむ後半生への生き直し，⑥マシューとアン，マリラとアンの家族愛，⑦ギルバートとアンの初恋，⑧英米文学と聖書の名句が引用される芸術性，知的な謎解きの面白さ，⑨19世紀末のカナダ社会，

政治の描写，⑩未来に夢を持ち，自分の力で人生を切り拓いていくアンの力強さ，⑪美しく心洗われる島の自然,⑫多数の花々と植物,⑬アンとダイアナの忠実な友情，⑭少女時代の懐かしい遊び,⑮ユーモアあふれる語り口,滑稽な場面の数々，⑯毎日を丁寧に堅実に暮らす生活の確かさ，⑰衣服，料理，住まい，家政術の描写，⑱妖精や精霊を信じるファンタジックな雰囲気，⑲幸せな人生とは何か，一貫して描かれる幸福の哲学，⑳キリスト教の信仰と隣人愛，㉑スコットランドの伝統文化,㉒周辺の人々の忘れがたい妙味,レイチェル・リンド夫人，ミス・ジョセフィーン・バリーなど年輩女性の賢さと知恵，㉓人間の善良さが描かれていること……[1)]。

私はこうした視点を踏まえながら，『赤毛のアン』の魅力を次の項目で書いてみたいと思います。1．はじめに（探求の動機と構成について）2．赤毛について，3．英米作品からの引用について，4．暗号としての植物について，5．フランス関係の事柄について，6．スコットランドについて，7．長老派について，8．モンゴメリの人生について，9．『赤毛のアン』の人気の秘密

2．赤毛について

⑴ 『赤毛のアン』と *Anne of Green Gables*

『赤毛のアン』の原題は *Anne of Green Gables*，訳すと，『グリーン・ゲイブルズのアン』となります。「グリーン・ゲイブルズ」はマシューとマリラの家の屋号です。村には同じ苗字の世帯も多いことから，屋号で呼び合うのが彼らの住むアヴォンリー村の慣わしのようです。

gable は「切妻屋根」と「破風」の両方をさします。「切妻屋根」は，「書物を半ば開いて伏せた形の屋根」と『広辞苑』にあり，「破風」は，「屋根から突き出た屋根窓の上部の小さい三角形の屋根をいただく小壁」と『平凡社大百科事典』にあります。マシューとマリラは緑色に塗られた三角屋根と，幾つかの破風のついた家に住んでいて，そこへアンがやってきて家族の一員になっていくので，*Anne of Green Gables* というタイトルになったわけです。

それを『赤毛のアン』と訳したのは，初代翻訳者村岡花子氏です。カナダ・メソジスト教会は，初めての外国伝道地に日本を選び，1884年（明治17年）に東洋英和女学校を開校しました。1893年（明治26年）に生まれた村岡花子氏は，10歳の時から東洋英和女学校で学んでいます。後に，東洋英和女学校に本部が置かれた日本キリスト教婦人矯風会の事務局の書記としても働かれました。1940年にドイツ・イタリア・日本が三国軍事同盟を結んだため，「敵国人」として母国に帰らざるを得なくなったカナダ人の女性宣教師から *Anne of Green Gables* を贈られた村岡花子氏は，この物語に感動し，昭和27年に『赤毛のアン』というタイトルにして出版されました。ヒロインのアン・シャーリーは，自分の赤毛にコンプレックスを感じていて，自分の赤毛をからかったギルバートの頭を石版でたたいたり，黒い髪に染めようとして緑色になってしまったりと，赤毛ゆえに巻き起こされる様々なドラマが中心にあるので，村岡氏はそうした内容からタイトルを『赤毛のアン』と訳されたのだと思います。アンがこのタイトルを知ったらきっと憤慨すると思いますが，これはぴったりあったタイトルだと誰もが思ったので，その後幾多の翻訳がでますが，誰もがタイトルはこれを踏襲することになります。そして，『赤毛のアン』(Red Hair Anne) というタイトルはカナダでも公式認定されています。

⑵　赤毛はなぜ嫌われるのか？

髪の毛が多様な西洋には，毛髪から人格を推測する紋切り型の分類があります。金髪（fair hair）の女性は家庭的な良妻賢母で，黒髪（dark hair）は情熱的な悪女，といった描き分けが小説や映画によくありました。神話や伝説では，髪は魔力や呪力を秘めたものとして描かれ，髪の色，形が多様な情念の表徴として描かれました。髪の色が持つ象徴性はヨーロッパにおいて特に顕著で，金髪はアポロンをはじめとする太陽神の髪であり，輝く太陽がもたらす黄金色をなす麦畑の連想から，豊穣女神の髪の色でもあり，最も美しく，高貴なものとされました。愛の女神アフロディーテや三美神の髪は，春を象徴する晴れやかな紫色であり，人魚の髪は海の色である緑で，悪魔や冥界の神々は赤毛とされました。

赤毛には裏切り者のイメージもありました。キリスト教では，イエスを裏切った弟子のイスカリオテのユダが赤毛だったという伝説がありますし，アダムとイヴの息子カインも赤毛とされています。カインは嫉妬から弟のアベルを殺害します。アベルばかりが神に気に入られていたからです。こうして，赤毛にはマイナスイメージがついてしまったため，赤毛の人は嫌われ，差別されてきました。ジュール・ルナールの小説『にんじん』でも，ルピック氏の次男は赤毛のせいで，「にんじん」と家族に呼ばれ，兄や姉と区別され，母親に対していじけています。夜，鶏小屋の戸をしめに行くとか，水車小屋へ使いにいくとかの用事を，兄と姉が拒むのは子供らしいこととされ，にんじんが拒むと罪悪視され，結局彼が行く羽目になります。

女性の赤毛には，エキゾチックで謎めいた美女のイメージがあります。16世紀イタリアの画家ティツィアーノ・ヴェチェリオ（1488–1576）は，好んで赤毛（金褐色）の美女を描きました。彼の名は『赤毛のアン』33章にも出てきます。ホテルの演奏会でアンが暗誦します。アンコールがおこるほどの上出来で，そこにいたアメリカ人の画家が，あの美しいティティアン（Titian：ティツィアーノ風の，赤褐色の，金褐色の）の髪をした女の子は誰，絵に描きたいような顔つきをしているね[2]と言う場面があります。20世紀のハリウッド女優では，ジョン・フォード監督作品やジョン・ウエインの西部劇に多く出演したアイルランド出身のモーリン・オハラが鮮やかな赤毛ですし，リタ・ヘイワースは「赤毛のリタ」と呼ばれ，人気がありました。彼女は1940年代にセックス・シンボルとして一世を風靡しましたし，スティーヴン・キングも，1982年に『刑務所のリタ・ヘイワース』を書いています。これが映画化されたのが，1994年のフランク・ダラボン監督の『ショーシャンクの空に』であることは，映画好きの人なら大抵知っていると思います。

赤毛はケルト系（スコットランド人・アイルランド人）に多いと言われています。ケルト系の人々は霊魂不滅を信じ，自然を崇拝し，そのため，聖樹・聖獣・聖山・聖泉等の信仰があり，妖精伝説も沢山あって，そこから魔法がかった不思議な個性が，文学や映画における赤毛に付加されることになります。

⑶　生物学的視点から見た赤毛

赤毛を生物学的視点から見ていくと，先ほど見た赤毛が担わされてきた裏切り，不信，不可解さといった象徴は，意図的に作られた偏見だということがわかってきます。

６万年前に人類はアフリカを出て世界へ広がっていきました。この時から，長い時間をかけて，各地の太陽の光の量に合わせて，肌の色，髪の色を変えて（進化させて）いったことが，最新の研究でわかってきました。６

万年前には，アフリカの強い紫外線から身を守るため，メラニン（黒褐色の色素）を体中にはりめぐらせていました。そのため，みんな褐色の肌をしていたのです。メラニンは過剰な光線の吸収に役立ちます。しかし，一方で紫外線は，ビタミンＤを作るのに必要なものです。ビタミンＤが不足すると，くる病や骨粗鬆症になります。緯度の高い地方へ広がっていった人類は，弱い太陽光からでも紫外線を獲得するために，メラニンを少なくするように進化していきました。その結果，肌の色は白くなり，こうして白い肌をもった人類が誕生することになったのです。こうして，広がっていったそれぞれの地の紫外線量に合わせて，様々な肌の色，髪の色が生まれてきたのです。

色素には，ユーメラニンとフェオメラニンの２種類があります。ユーメラニンは褐色～黒色で，これが多いと髪の色は濃くなります。フェオメラニンは黄色～赤色で，これが多いと赤味を帯びた色になります。赤毛はユーメラニンとフェオメラニンが混ざった髪で，フェオメラニンが多いため，赤く見えます。赤毛の人はユーメラニンが少ないので，肌の色は白くなります。ユーメラニンの少ない色白の人は，日焼けしやすく，強い紫外線を浴びると，肌を守るためにユーメラニン色素を急激に作り出すため，ソバカスができやすくなります。『赤毛のアン』のアンの赤毛と色白の肌とソバカスにはこうした理由があったのです。余談ですが，テレビの「世界仰天ニュース」で，焚き火のそばのスプレー缶が破裂して，顔に大火傷を負った青年の傷が癒え，瘡蓋が全てはがれて新しい皮膚になった時，今まで顔一面にあってコンプレックスのもとになっていたソバカスがきれいになくなっていたという話をやっていました。赤毛がいやで髪を染め，緑色にしてしまったアンのことですから，アンの時代にこの仰天ニュースのような情報が知られていたら，アンのもう一つのコンプレックスのもとであったソバカスを取り除くために，アンもきっと何らかの方法でこれを試し，大失態を招いていたかもしれませんね。アンの身体的特徴はアンのせいではないし，人類が６万年かけて到達した進化に，偏見をもったり，差別してはいけないことがわかってきます。人類が長い年月を過ごしている間に，様々な無知から，こうした偏見や差別が生まれてしまったわけですね。今も，世界中にある様々な偏見や差別も，全てはこうした無知からくるもので，私達はよく学んで，こうした偏見や差別をなくしたいものだと思います。

３．英米文学作品からの引用について

モンゴメリは本当に文学が好きで，子供の頃から家にあった本は貪るように読んでいました。ロングフェロー，テニスン，ウイッティア，スコット，バイロン，トムソン，ミルトン，バーンズ，ディケンズ，リットン，アンデルセン等々。

創作活動も早く，９歳の時に，ジェイムズ・トムスンの詩「四季」に刺激され，初めて詩作しています。以来，10代からエッセイ，詩，小説，を新聞社や出版社へ投稿。21歳の時は教職を休職し，ノヴァスコシア州の州都ハリファクスのダルハウジ大学で，英文学の特別講義を受講しています。そこで学びながらもせっせと投稿し，採用された原稿料で詩集を買うといった生活を送っていただけあって，英文学に造詣深く，『赤毛のアン』の中にも，多くの文学作品からの引用が入っています。しかし，どこから引用したかは当然書いてないので，出典探しに情熱を傾けられた松本侑子氏の研究のお陰で，引用の出典と『赤毛のアン』という作品の内容との密接なつな

がりを知ることができるようになりました。その詳細は，松本氏の，『赤毛のアンへの旅』（NHK 出版），『誰も知らない「赤毛のアン」』（集英社），『赤毛のアンに隠されたシェイクスピア』（集英社）等々を読んで頂くことにして，ここでは，その中から２つを取り上げ，私の視点も交えながら紹介したいと思います。

⑴　英国ヴィクトリア朝の詩人ロバート・ブラウニングの詩「エヴリン・ホープ」からの引用

外国文学の巻頭には，古典文学の一節が書かれてあることがよくあります。題辞（モットー）と呼ばれるもので，物語の主題を示唆するためのものです。モンゴメリは『赤毛のアン』の扉に，ブラウニングの「エヴリン・ホープ」の一節を題辞として掲げています。

The good stars met in your horoscope,
Made you of spirit and fire and dew.

訳は訳者によって様々で，一例として，三人の訳者の訳を書いておきます。

天空の導きの星が汝の運命を定め，
活気と火と露もて汝の魂を創り給いし（村岡花子）

よき星がそなたの天空につどい，
そなたは，魂と炎と露の存在と化した。（山本史郎）

あなたは良き星のもとに生まれ
精と火と露より創られた（松本侑子）

良き星があなたの天空に集まり，
あなたを精神と情熱と清らかさで満たした（佐藤義隆）

僭越ながら，三人の訳者の他に私の訳も書いてみましたが，このように，訳者によって訳し方は様々ですが，この題辞は，アンの気質を表したもので，アンの幸運な星まわりに祝福された運命を予感させます。精と火と露から創られたということは，精神性が豊かで，炎のような情熱に満ち，露のようにみずみずしく清らかなアンの気質を表していて，アンの明るい未来と豊かな内面を示しています。

しかし，「エヴリン・ホープ」そのものは，少女の死を描いた作品なので，『赤毛のアン』の題辞としてふさわしくないのではという疑問が残ります。この作品は，16歳の少女エヴリン・ホープの亡骸を前にして，生前に彼女と一度も話をしたことのない48歳の中年男性が，一方的に思慕を告白し，嘆き悲しみ，生まれ変わったら一緒になろうと言っている内容です。言われたエヴリンにしてみれば，ちょっと引いてしまいそうですが，この男性がエヴリンの亡骸に向かって，「君は良き星のもとに生まれ，精と火と露より創られた」といっているのです。だから，『赤毛のアン』の題辞としては違和感が残るのですが，松本侑子氏の研究で，この文章が，原作の哀悼の文脈から離れた形で，他の文学作品でも多く引用されていることがわかりました[3]。だからモンゴメリも，この文章の素晴らしさだけを借りてきたということで了解すればいいのではないかと思います。

また，モンゴメリは，『赤毛のアン』の結末部分にもブラウニングの詩「ピッパが通る」の一節で終わらせています。“God’s in His heaven, all’s right with the world,” whispered Anne softly.（「「神は天にあり，この世はすべてよし」アンはそっと呟いた」）とあります。北イタリア，アーゾロの製紙工場で働く少女ピッパは，１年でたった１日の休みを迎えて，喜びいっぱいで詩を歌いながら町を歩きます。通り過ぎていくピッパの明るく純真な言葉をふと耳にした人々は，自分の醜い考え，陰謀や不貞，殺人の企みを恥じて心を入れかえます。無心の善意が世界を良き方向へ変える，というブラウニングの明るい世界観が込

められた詩です。

16歳になったアンは，クイーン学院を卒業し，大学へ進むはずでしたが，マシューが急死したため，マリラは，一人での農場経営は無理なため，グリーン・ゲイブルズの売却を考えます。アンは悩んだ末，どう生きるべきか結論を出します。自分を育ててくれたマリラとグリーン・ゲイブルズ農場のために，ひとまず進学をあきらめて村に残り，教師として働きながら独学で勉強を続け，学力を高めていこうと決心します。人生の岐路において，思いがけず不本意な結果になっても，今ここで生きることに最善を尽くす。そうすれば，いつかきっと最善の収穫が返ってきて，次なる未来の扉が自然に開かれる。全ては天の神が守り，導いて下さる。アンはそう信じて，再び前向きに生きていこうと決意します。そのアンの気持ちを，ピッパの詩の一節は見事に代弁しています。『赤毛のアン』は，ブラウニングの詩で始まり，ブラウニングの詩で終わるという構造になっています。

⑵　ジェームズ・ラッセル・ローウェルの詩『サー・ローンファルの夢想』からの引用

『赤毛のアン』第２章「マシュー・カスバートの驚き」で，マシューは，孤児院からやってくる男の子を迎えに駅まで馬車を走らせます。そこで，女の子が待っていようとは，夢にも思いません。晴れ渡った春の午後，よく手入れされた農園，すがすがしく香る樅の林，白い花をつけたすもも，いい匂いのする林檎園等を過ぎ行き，馬車は進んでいきます。そして，「小鳥たちは歌っていた。あたかも今日が一年でただ一日の夏の日であるかのように（松本侑子訳）。」と続いて描かれています。ここの部分の原文は，The little birds sang as if it were the one day of summer in all the year.となっています。下線部の引用の原典は，松本氏が2000年に『赤毛のアン』を翻訳された時点ではまだわからなかったのですが，その後，ウイルムズ・ハースト氏の引用リストに記載があって出典がわかりました。しかし，ハースト氏のリストには，解説は一切ないので，松本氏が調査して，2008年の『赤毛のアン』第７刷には，この下線部分の解説が書いてありますので，松本氏の注が如何に詳しいかの一例としても，その部分をそっくりそのまま書いておこうと思います。

「これは，アメリカの詩人・ハーバード大学教授・批評家ジェームズ・ラッセル・ローウェル（1819～91）の詩『サー・ローンファルの夢想』（1848）の第一部，第二段落の第三行，第四行からの引用。詩の内容は以下のとおり。アーサー王の円卓の騎士サー・ローンファルが聖杯探索の途中で眠り，夢で乞食に出会い，キリストのためと思って金貨とパンを与えたところ，その乞食はキリスト本人であり，「自らの物を与える者は，三人を養う。自分自身，飢えた隣人，そして我キリスト」と言われる。そして乞食と食事を分かち合った器こそが聖杯なのだと教えられて，聖杯探索をやめる，という内容。詩は，ローンファルが，悲壮な決意で聖杯探索に出かけるところから始まり，やがて彼が眠り，夢に入るとすぐに，この二行が出てくる。マシューがアンを迎えに行くときの，うららかな日よりの描写として使われていたこの二行は，聖杯探索の夢にちなんでいたのだ。つまりアンを迎えに行くマシューは，キリストの聖なる杯を探しに行く騎士として描かれている。また聖杯は，この地上に身近にいるアンである，という示唆もある。聖杯とは，キリストが最後の晩餐に用いた杯で，キリストがはりつけられた後，十字架の下でアリマタヤのヨセフがキリストの血を受けたとされる貴重なも

の。中世のアーサー王伝説では，円卓の騎士たちは，聖杯を探し出すことを悲願としていた。アーサー王伝説は，本書の第28章で登場している[4]。」

聖杯とは，直接的にはイエスが最後の晩餐で使った杯のことですが，ローウェルの詩では，隣人愛の比喩として使われていることがわかります。困っている人に親切にする心が聖杯ということで，特別な場所に，特別な物としてあるのではないことがわかります。この詩の引用から，マシューは，キリストの聖なる杯を探しに行く騎士と重ねられていて，サー・ローンファルが乞食に出会い，施しをして真の愛を知ったように，マシューもまた，アンという愛に飢えた貧者に出会い，引き取るという施しをすることで，マシュー自身真実の愛に目覚め，神とアンの愛を受けていくという暗示があります。また，アン自身が聖杯であるという示唆にもなっています。こんなことまで考えてローウェルの詩を引用しているモンゴメリは凄いと思います。

話は少しそれますが，ダン・ブラウンの『ダ・ヴィンチ・コード』では，マグダラのマリアの遺骨が聖杯ということで，そのありかを，ハーバード大学の象徴学者ラングドンと暗号解釈官ソフィーがつきとめていく話です。この作品の要旨は，マグダラのマリアは娼婦として貶められているが，実は彼女は，イエス・キリストの妻であり，子までなしていたが，この秘密をダ・ヴィンチが彼の作品「最後の晩餐」の中にコード（暗号）として残し，現在にまで至る二人の子孫を守っているのが，秘密結社シオン修道会であり，ダ・ヴィンチはこの結社の総長だったというものです。この作品では，ラングドンは聖杯のありかをつきとめ，聖杯に跪くところで終わります。この作品では，聖杯探求の目的は，貶められ，失われた聖なる女性に跪き，心からの祈りを捧げることだったからです。「聖杯」というものについていろいろ考えさせられました。

4．「暗号」としての植物について

『赤毛のアン』の特徴の一つに，多くの種類の植物がとても詳しく描かれていることがあげられます。その理由としては，プリンス・エドワード島の自然がそのように豊かだったことと，モンゴメリ自身が植物に高い関心を持っていたことがあげられます。彼女はガーデニングが好きで，丹精した花々を家中に飾っていたそうです。しかし，彼女は，植物をありのままに描いてはいません。花の持つ意味を，筋書きや状況に合わせて使っていることが多く見られます。『アン』の背景となっているヴィクトリア時代には，花言葉が，賞賛から嫉妬まで，あらゆる感情の表現に暗号として用いられていました。そうした視点で『アン』の中の植物を見ると，様々なことが見えてきます。主だった植物を通して物語の構造をみてみましょう[5]。

(1)　桜

まず桜が目につきます。ブライト・リヴァー駅でマシューを待っていたアンは，誰も迎えに来なければ，目に見えるところにある大きな桜の樹に登って夜を明かすつもりでいたことをマシューに告げます。家までの道すがらにも，山桜が花を盛りに咲いています。そして，グリーン・ゲイブルズの家の窓辺には，一本の桜の大木が立っています。この桜は，日本のお花見で見る桜に似ています。そして，真っ白に咲き誇るその姿から，アンは「雪の女王」と名づけます。これは，デンマークの童話作家アンデルセンの「雪の女王」を連想させます。実際モンゴメリは，アンデルセン童話を子供時代から愛読し，インスピ

レーションの源泉であると書いています。欧米では，桜というと花よりサクランボウを指すことが多く，チェーホフの『桜の園』も，サクランボウの園のことです。グリーン・ゲイブルズにはリンゴとサクランボウの果樹園もあり，砂糖漬けにしたり，フルーツケーキに入れたりして，マリラは来客に出しています。

桜の花言葉は，樹は「良き教育」，花は「精神美」で，これは，花言葉がぴったり物語りにあてはまっています。島に初めてやってきたアンを出迎えたのは桜の巨木，「雪の女王」で，花言葉にある，「良き教育」と「精神美」を重んじるマリラの住む家へ辿り着いたことが暗示されています。

⑵　柳

次に目につくのは，グリーン・ゲイブルズにある柳の木です。モンゴメリは柳にどんな意味を込めておいたのでしょうか。柳の象徴を見てみましょう。いくら枝を伐採しても，また生えてくるところから，キリスト教ではキリストの福音を象徴しています。しかし，英文学では，恋に破れた者たちの頭に柳の冠をかぶせます。つまり柳は，悲しみにくれる人を，そのやさしい柳でくるみ，慰めてくれる木なのです。ここから柳は，失恋やその結果としての死の象徴としても使われています。そうした象徴を持つ柳がなぜグリーン・ゲイブルズに置かれたのでしょうか。２つの理由があると松本侑子氏は指摘しておられます。一つは，キリスト教的にみると，老兄妹マシューとマリラは，神の思し召しによってアンという光の子を授けられ，初めて真の愛情に目覚め，幸福へと導かれます。こうした神の福音がこの家に訪れることを柳によって暗示させていると取れます。もう一つは，英文学的に解釈すると，マリラもマシューも独身のまま生涯を終えますので，グリーン・ゲイブルズは，これまで実らなかった恋の家を意味しているという考え方です。どちらも意味深く，興味深いですね。『アン・シリーズ』には，『風そよぐ柳荘のアン』というのがあります。村岡花子氏の訳では『アンの幸福』というタイトルになっていますが，この『風そよぐ柳荘のアン』は，結婚せずに，独身を貫いた老姉妹の屋敷で，そこにアンは下宿しています。この屋敷には，生涯独身だった姉妹の他に，独身の中年家政婦もいて，この家もまた実らなかった恋の家なのです。

⑶　マドンナ・リリー

これは大輪の白百合で，香りがとても強く，第14章に登場します。とってもいないブローチを盗んだかどで部屋に閉じ込められたアンが，どうしてもピクニックに行きたいために嘘の告白をする朝，マドンナ・リリーが馥郁と香り，神の祝福の精のように漂った，と描かれています。この描写には，誤解が解けてピクニックに行けるようになることが暗示されています。欧米の人々は，白百合は純潔な聖母マリアの象徴だと知っていますから，マドンナ・リリーの香りが漂うという描写を読むと，アンには罪がないという暗示として読めるのです。マドンナはフランス語で聖母マリアのことです。イギリスの聖僧ビード（673―735）が白百合をマリアの象徴と定めて以来，白百合にはマドンナ・リリーという名がつきました。百合の白い花びらは，マリアの純潔な身体を意味し，マリアを描いた宗教画にはしばしば百合が描かれるようになりました。ダ・ヴィンチ，ボッティチェリの「受胎告知」の絵にも白百合が描かれています。因みに，聖母マリアの母の名は Anne で，マリラ（Marilla）という名は，聖母マリアから派生したものと思われます。マシューはキリ

ストの弟子マタイ（Matthew）の英語読みです。グリーン・ゲイブルズ一家は，キリスト教によって結びついているといえます。モンゴメリが敬愛するシェイクスピアの妻と妹の名も Anne であることを考えあわせると，『赤毛のアン』のヒロインの名に Anne を選んだのは，彼女の周到な選択だったのでしょうね。

話は少し逸れますが，マリアに受胎告知するのはガブリエルという大天使です。天使は神に仕え，神と人間を仲介し，神の意思を伝える役割を果たします。天使の思想は，ゾロアスター教に始まり，ユダヤ教，キリスト教，イスラム教へと受け継がれます。ローマ・カトリック教会では，天使は9階級に分類されています。上級3隊として熾天使，智天使，座天使，中級3隊として主天使，力天使，能天使，下級3隊として権天使，大天使，天使の合計9階級です。有名な四大天使，ガブリエル，ミカエル，ラファエル，ウリエルは，天使の階級でいえば下から2番目なのです。会社の役職に例えれば係長クラスということで，実務を沢山こなしているのが係長クラスですから，よく働いている天使だと想像できます。ガブリエルは，神の言葉を伝える天使であり，受胎告知にふさわしい天使ですね。イスラム教ではガブリエルはジブリールと呼ばれ，ムハンマド（マホメット）にコーランを伝えた天使とされ，イスラム教では最高級の天使です。ミカエルは人々を守護する天使で，そのイメージから，山頂や建物の頂上にその像が置かれることが多いようです。英語の人名マイケル（Michael），フランス語の人名ミシェル（Michel）はこの天使の名に由来しています。ラファエルは癒しを司り，ウリエルは裁きを司ります。また，ヘブライの伝承では，ウリエルは焔の剣をもってエデンの園の門を守る智天使の一人となっていますし，ミルトンの『失楽園』では，ウリエルは熾天使として登場し，太陽の運行を司る天使とされています。

5．フランス関係の事柄について

『赤毛のアン』ではフランス人が差別的に扱われています。『アン』に登場するフランス人は二人で，グリーン・ゲイブルズの雇い人ジェリー・ブートと，ダイアナ・バリーの家の臨時手伝いメアリ・ジョーです。ジェリー・ブートは，「うすのろの半人前」として描かれていて，食事も奉公人用の粗末なものですし，アンが間違えて作った痛み止め入りケーキも，マリラは，「ジェリー・ブートですら食べられないから，豚におやり」と言っています。ダイアナの家のメアリ・ジョーも，「頭では何も考えることのできない，役立たずの丸い顔をした肥えたフランス娘」とけなされています。この二人の描き方，扱われ方をみると，モンゴメリをはじめ，島の人々全体に，こうしたフランス人への蔑視があったことがわかります[6]。これは，プリンス・エドワード島の歴史と関係しています。

プリンス・エドワード島は，最初は先住民族ミクマック族によって，アベゲイト（海に浮かぶゆりかご）と呼ばれていましたが，紀元前10世紀にはケルト人がやってきたり，紀元10世紀にはヴァイキングもやってきました。ヨーロッパ人が本格的にカナダへやってくるのは，15世紀の大航海時代以降で，探検に始まり，その後，移民，定住の流れになっていきます。1497年に，英王ヘンリー7世の命で，ジョン・カボットがニュー・ファンドランドを発見します。1534年にはフランス王フランソワ1世の命で，ジャック・カルティエがカナダへ上陸し，カナダをフランス領と宣言しました。この時，アベゲイトへも上陸しています。17世紀には本格的なフランスからの移民が始まります。カナダはフランス語

でヌーベル・フランスと呼ばれました。1603年に，フランス人サミュエル・ド・シャンプランは，アベゲイトをイル・サン・ジャンと改名しました。1663年に，フランス人はイル・サン・ジャンに居留地を建設し，1710年から対岸のアカディア（現ノヴァスコシア州）から農民が入植してきます。フランス人と先住民族の関係はおおむね良好でした。ミクマックから毛皮を買ってヨーロッパへ輸出したり，ニューファンドランド付近で鱈を獲ってヨーロッパへ売ったり，カトリックを先住民に布教したりしていました。因みに，魚編に雪と書いてタラというのは，雪の季節においしいのでそういう字になったそうです。またタラは，いつもエサを腹いっぱい食べてお腹をいつもパンパンにさせているので，そこから沢山食べることを鱈腹食べるというようになったそうです。ビーバー（フランス語でカストール）の毛皮の輸出が総輸出量の７割を占めていて，ルイ15世の寵妃ポンパドゥール夫人（1721–64）は，「カナダが有用なのは，ただ単に，私に毛皮をもたらしてくれるから」と言っているほどです。彼女の名前は『アン』にも何回か出てきます。アンが初めて演奏会を見に行く時，髪をポンパドゥールに結います（19章）。前髪を大きく膨らませて，うしろに結い上げたもので，マシューがパフスリーブのドレスを買いに行った店の店員もこの髪型に結っていました。ポンパドゥール夫人が流行らせて100年以上経ったカナダでも，おしゃれの代名詞だったことがわかります。

その後，イギリス人も入植し，利権を巡ってフランスと対立し，最終的には1763年のパリ条約で，北米のカナダとアメリカはイギリス領となったのです。イル・サン・ジャンの州都は，英国王ジョージ三世の王妃シャーロットに因んで，シャーロットタウンと命名され，島の名も，イル・サン・ジャンの英語読み，セント・ジョン島と改名されました。

モンゴメリの父方の初代モンゴメリは，1769年にスコットランドから島へやってきます。母方のマクニールの初代は，1775年にやってきます。初代モンゴメリが島へ来て30年後の1799年に，島の名がプリンス・エドワード島に変わり，今に至っています。北米イギリス軍総司令官としてノヴァスコシアの州都，ハリファックスに赴任していたケント公（国王ジョージ三世の王子エドワード）に因んでつけられました。ケント公は後に，ヴィクトリア女王の父となる方です。

島が英領になり，数千名のフランス系住民が島を去り，カナダ本土のケベック州やアメリカのルイジアナ州等へ移っていきました。島に残ったフランス系住民は差別されていくことになります。こうした歴史の中で，1755年に，残ったフランス系住民をイギリス軍が強制的に追放する事件が起こり，この時にあった実話（その日が結婚式当日だった二人が，はぐれて離ればなれになって故郷を追われ，妻は夫を長い年月広大なアメリカ大陸を探し続け，夫が慈善院で死ぬ間際に巡り合う）をもとに，アメリカの詩人ロングフェローは『エヴァンジェリン』（1847）を書きました。この長詩が流行して，アメリカ人に東部カナダへの憧れを抱かせ，プリンス・エドワード島をはじめ，カナダ東海岸へ，夏になるとアメリカ人の避暑客が多く訪れるようになりました。『赤毛のアン』33章は，「ホテルの演奏会」というタイトルですが，このホテルは，そうしたアメリカ人の長期滞在者が，音楽会やパーティを開きます。そこでアンも自分の暗誦を披露したわけです。

ルイジアナ州ラファイエットを中心に住むフランス系の人々は，プリンス・エドワード島やアカディアから流れて行った人々の子孫で，Acadian（アカディア人）がなまって，Ca-

dian→Cajun（ケイジャン）と呼ばれるようになりました。陽気で，音楽好き，ダンス好きな人々です。ケイジャン料理というと，香辛料をたっぷり使うのが特徴ですが，代表的ケイジャン料理に，ケイジャン・ポップコーンがあります。小エビ，カニ，ザリガニのフレークを混ぜたトウモロコシの練り粉を油で揚げたものです。

1864年には，カナダ各地の植民地の統合を話し合う会議がプリンス・エドワード島のシャーロットタウンで開かれ，カナダ初代首相となるＪ．Ａ．マクドナルドを含む23人の建国の父祖達が集まりました。３年後の1867年７月１日にカナダは連邦制を採択し，カナダ自治領となりました。この日は現在，カナダの建国記念日になっています。プリンス・エドワード島は，1873年に７番目の州として，遅れてカナダ連邦に加入しました。独立精神が強かったせいですが，それでも加入を決めたのは，幾つかの経済問題を抱えていたために，そうした経済問題を肩代わりしてもらうことを条件に加入しました。アンがアヴォンリーにやって来た1880年代は，島がカナダ連邦に加入してまだ10年ちょっとの時で，24章に，愛国心を培うために，学校が旗を買う話がでてきますが，こうした背景を知ると，そのことが納得できますね。

６．スコットランドについて[7)]

カナダは移民の国で，フランス，イングランド，スコットランド，アイルランド等から大西洋を越えて渡ってきた人々が開拓した国です。モンゴメリー族は，スコットランド系ですし，37歳の時に結婚した長老派の牧師ユーアン・マクドナルドもスコットランド系です。マシューもマリラもスコットランド系であることが，37章でわかります。マシューが急逝した後，お墓参りをしたアンは，マシューのお母さんがスコットランドからもってきたバラを挿し木してきたと語ります。主人公のアンもスコットランド系と思われます。第５章で，アンはノヴァスコシアで生まれ育ったと話しています。ノヴァスコシアは「新しいスコットランド」という意味のラテン語で，カナダ南東部に実在するスコットランド移民の多い地名です。５章で，アンは暗記している詩を６つあげていますが，５つはスコットランド人が書いた作品です。アンはまた，スコットランド語も使っています。第４章で，窓枠に置いてあるゼラニウムを「ボニー」と呼びますが，これはフランス語の「ボン（良い）」に由来するスコットランド語で，「美しい，良い」という意味です。27章では，赤毛を染めたら緑色になり，髪を刈り上げ，髪が伸びたら頭に黒いベルベットを巻き，「スヌード」と呼ぼうといいます。「スヌード」はヘアバンドを意味するスコットランド語で，昔，スコットランドの未婚女性が独身の印に頭にまいたものです。19章では，アンは冬の外出にタモシャンター帽をかぶります。これは冬が厳しいスコットランドで農民がかぶるボンボン付きの大きなベレー帽で，耳まですっぽりおおって寒さを防ぐ独特のものです。

『アン・シリーズ』で，アンと心を通わせる人々はスコットランド系の人々です。第２巻『アンの青春』で，アンのお気に入りの教え子ポールは，スコットランド人の祖母に育てられ，毎日スコットランドの朝食の定番，オートミールを食べています。オートミールというのは，カラスムギやエンバクから作るかゆのことで，サミュエル・ジョンソン（1704-84）は，貧困と病苦に耐えながら独力で完成させた，独特の解説で有名な辞書，*A Dictionary of the English Language*（1755）の中で，オートミールのことを，「イギリス

では馬のエサだが，スコットランドでは人間の食べ物」と定義しています。イギリスの人々がスコットランドの人々をいかに馬鹿にしていたかがわかります。因みに，辞書には面白いものが他にもあって，例えば，アメリカの作家アンブローズ・ビアスの *The Devil's Dictionary*（『悪魔の辞典』）では，結婚を，「主人一人，主婦一人，それに奴隷二人から成るが，総計では二人になってしまう共同生活体の状態または情況」と定義しています。

また，『アンの青春』で，マリラは遠縁の双子デイヴィとドーラを引き取りますが，二人の苗字はキースで，スコットランド語で森を意味します。第３巻『アンの愛情』では，アンの親友フィリッパ・ゴードンがスコットランド系です。「ゴードン」は，分家が157もある有名なスコットランド貴族の姓です。

スコットランドは，イギリスを構成する連合王国の一つで，首都エジンバラと経済的中心地グラスゴーが二大都市。連合王国の一部といっても，固有の歴史と伝統を頑なに守り，独立した一つの国のようなものです。立法，宗教，教育に独自の制度を持っています。言語的，文化的にもスコットランドは６世紀にアイルランド島から移住したケルト民族の特徴を持ち，イングランドのアングロサクソン的要素とは対照的です。11世紀頃，ケルト系諸部族の統一により，スコティア王国が成立し，以後，隣国イングランドとの長年にわたる対立があり，1603年にはスコットランド王ジェイムズ６世が，イギリス王を兼ねてジェイムズ１世と称し，同君連合の関係に入りましたが，1707年に連合条約が成立し，スコットランドはグレート・ブリテン王国に統合されます。この条約でスコットランド独自の議会は消滅し，復活するのは1997年まで，300年近くも待たねばなりませんでした。スコットランドの歴史は，一言で言うと，イングランドとの戦いの歴史なのです。アンがいかにスコットランドを愛しているかは，彼女の暗記している詩の多くが，スコットランド人の書いた作品だということを先ほど書きましたが，中でも，エイトン作の「フロッデン後のエジンバラ」は，1513年，イングランドとスコットランドの国境地帯フロッデンで繰り広げられた両国の戦いをモチーフにした作品で，スコットランド兵の勇敢な死闘，国王の戦死，王と息子達を喪って悲嘆に沈む首都エジンバラのことが劇的に描かれています。アンは，イングランドに敗北したスコットランド人の愛郷心が激しく燃え立つような詩を多く暗記しているのです。

スコットランドの歴史上の人物には，「蛍の光」の原詩で有名な国民的詩人ロバート・バーンズ（1759–96），アンが大好きな国民的作家ウオルター・スコット（1771–1832），『ピーターパン』の作者ジェイムズ・バリー（1860–1937），『サミュエル・ジョンソン伝』を書いたジェイムズ・ボズウェル（1740–95），『宝島』や『ジキル博士とハイド氏』等で有名なロバート・スティーブンソン（1850–94），『国富論』を書いたアダム・スミス（1723–90），長老派を生んだ宗教改革者ジョン・ノックス（1514？–72），『人性論』，『英国史』等を書いた哲学者デイヴィッド・ヒューム（1711–76），肖像画で有名な画家ヘンリー・レイバーン（1756–1823）等がいます。因みに，ロンドン警視庁のことをスコットランドヤードというのは，昔ここにスコットランド王の離宮があったことからこのように呼ばれるようになったそうです。

７．長老派について

グリーン・ゲイブルズのカスバート兄妹は，長老派教会に通う，と25章にでてきます。キリスト教の歴史を振り返ると，かつての西

ヨーロッパではカトリックが信仰されていましたが，1517年にルターが宗教改革を進めて改革派が生まれます。長老派は，この改革派を学んだスコットランドの神学者ジョン・ノックスがエジンバラで宗教改革を行って生まれた教派で，1560年，スコットランドの国教となります。18～19世紀にスコットランド人が新大陸へ移住するにつれて，長老派はアメリカ，カナダにも広がっていきました。教義としては，カトリックの教皇を否定し，教会の運営は教会員から選ばれた長老の合議によって行われます。

『アン』でも，アヴォンリーの教会で，合議制がとられていることが書かれています（第21章）。教会に18年勤めていたベントリー牧師が，高齢のために退職した後の後任の選出方法は，牧師の候補者を各地から呼んできて，試験的に何週間か説教してもらい，その間に信者が，それぞれの牧師の神学は確かか，人柄はどうか，説教はうまいか，身元は確かか等を確認していくものです。アンも大人に混じって，あの人の説教には威厳が足りないとか，想像力が足りないとか批評しています。そして最後に，信者の代表が新しい牧師を決めます。そうやって決まった若いアラン牧師とその夫人にアンは惹かれ，特に夫人に憧れて熱愛していきます。

長老派の教義は，勤勉を尊び，華美を戒め，禁欲的です。同じプロテスタントでも，ルター派（作家ではゲーテやアンデルセン等）は飲酒と喫煙を認めていますが，長老派は否定的です。マシューが，酒，タバコを日常的には嗜まないのも，マリラが飾り気のない服を着て，アンにもそうさせ，パフスリーブを虚栄だとして認めようとしないのも二人が敬虔な長老派の信者だからです。

『アン』には，海外宣教師の話もよく出てきます・第１章の冒頭には，リンド夫人は日曜学校の運営を手伝い，教会援護会と海外伝道後援会の顔役でもあると書かれています。海外伝道とは，アジア，アフリカ各国にキリスト教を広めようとする布教活動で，各宗派が行っていました。日本へも明治初期に北米やカナダから多数の宣教師がやってきて，布教と同時に学校を開き，日本の女子教育の基礎を作りました。クイーン学院でアンと同級生だったプリシラ・グラントは，第５巻『アンの夢の家』で，海外宣教師と結婚して日本に住んでいます。『赤毛のアン』の初代翻訳者村岡花子氏も，こうして作られた東洋英和女学校で学ばれたのでしたね。

アンの時代のカナダには，長老派教会と英国国教会とカトリック教会がありました。スコットランド系の人々は長老派教会へ通い，イングランド系の人々は英国国教会へ通い，フランス系の人々はカトリック教会へ通いました。1890年代の時点で，プリンス・エドワード島には約３万人の長老派信者と，５千人の英国国教会信者がいたことがわかっています。カトリックの信者数はわかっていません。島にはスコットランド系の人々が多かったので，このような数になっていますが，カナダ全体では英国国教会が主流でした。英国国教会は，ヘンリー８世が，最初の王妃と離婚して，アン・ブーリンと再婚するために作った教会でした。それまでカトリック教会に属していたのですが，カトリックは離婚を認めないため，ローマ教皇との臣従関係を否定して，自分が英国国教会の首長になったのです。この英国国教会は，教会政治と礼拝様式にはカトリックの要素を残していますが，教義はプロテスタント的で，カトリックとプロテスタントの中間的存在といえます。モンゴメリの日記に，15歳で初めて乗った汽車の旅で，英国国教会の婦人と親しくなった時，モンゴメリが長老派とわかった途端，「異教徒同然，

キリスト教の埒外」とみなされたと書かれています。イングランド人のスコットランド人蔑視がよくわかります。

長老派周辺の作家達のことを調べてみると，米国の作家では，農薬問題を告発した『沈黙の春』や神秘さや不思議さに目を瞠る感性の必要性を説いた『センス・オブ・ワンダー』を書いたレイチェル・カーソンは長老派の牧師の孫ですし，マーク・トゥエインは長老派の学校で学んでいます。英国では，『ロビンソン・クルーソー』を書いたダニエル・デフォーが長老派で，長老派とほぼ同じ教義の改革派には，グリム兄弟や『ハイジ』の作者ヨハンナ・シュピーリがいます。

8．モンゴメリの人生について

ルーシー・モード・モンゴメリは，1874年11月30日，プリンス・エドワード島北岸に近いクリフトン（現在のニューロンドン）で生まれました。ウィンストン・チャーチル，マーク・トゥエインと誕生日が同じで，彼女はこのことを誇らしく思っていました。この日は，星座でいえば射手座で，この星座の人は前向きで，行動力があり，おおらかで長寿であるといわれていますが，あたっている面もあり，そうでない面もあるようです。俳優では宮崎あおいや織田裕二が射手座だそうです。

ルーシーは，母方の祖母の名をとってつけられ，モードはヴィクトリア女王の王女の名からとってつけられました。父方も母方もスコットランド移民で，母クレアは，ルーシーが２歳になる前に結核で亡くなりました。23歳でした。ルーシーは，母方の実家マクニール農場の祖父母に引き取られ，育てられました。厳格な祖父母のもとで，パフスリーブのドレスを着せてもらえなかったり，夜，演芸会へでかけるのを禁じられたりしました。アンと同じです。家にあった本を暗記するくらい繰り返し読んで過ごしました。祖父母の，厳格で古風な教育のため，精神的には満たされなかったようです。モンゴメリの多面的な性格は，両家の性格を受け継いだものといわれています。父方からは，陽気で情熱的な性格と豊かな想像力を受け継ぎ，母方からは，厳格で保守的で理性的な性格を受け継ぎました。こうして，人前では良識を弁えた常識的人物として振る舞い，小説や日記で自由な思想や本音を書きました。

９歳の時，ジェイムズ・トムソンの詩「四季」に感銘を受け，自分でも詩を書いたのが，彼女の創作人生の始まりでした。10代からエッセイ・詩・小説を新聞社や雑誌社へ投稿しています。父はカナダ中部サスカチュアン州プリンス・アルバートへ移り，再婚して家庭を持ちました。1890年，15歳のモンゴメリは，最愛の父と暮らすために大陸横断鉄道ではるばる４千キロを旅して父のもとへいきますが，若い継母との折り合いが悪く，１年で島へ戻ります。島に戻ったモンゴメリは，シャーロットタウンのプリンス・オブ・ウェールズ・カレッジへ入学し，アンのように街に下宿して１年で教員免許を取ります。この学校はクィーン学院のモデルになった学校です。19歳の彼女は，1894年～95年，島北西部のビデフォードの牧師館に下宿し，教師として働きます。生徒によっては熱意が持てないこともありました。また，もっと学びたい，作家になりたいという思いが強く，休職して，貯金と祖母の援助で，ノヴァスコシア州ハリファックスのダルハウジ大学で英文学の特別講義を受けます。大学では，ラテン語，ギリシャ語，フランス語，古代ローマの作品，シェイクスピアの作品等を学びながら，様々な投稿も続けました。学費が続かず島に帰った彼女は，1896年，島北西部のベルモントで再び教職につきます。教師の仕事と，勤務前

に執筆活動をするというハードな生活が続きました。ベルモントは寂しい村で，孤独に苦しみ，親戚の神学生エドウィン・シンプソンと婚約します。

1897年からは島東部のロウアー・ベデークで教えました。そこで，下宿先の息子ハーマン・リアードと愛し合うようになり，エドウィンに婚約解消を申し出ます。だからといってハーマンと婚約したわけではありません。彼女が日記に書いている愛することのできる男性の理想像は，①ハンサム，②教養，③生まれ，④地位，⑤知性でした。エドウィンはこの条件を満たしていましたが，愛することはできませんでした。松田聖子流にいうと，ビビッとくるものがなかったのです。ハーマンは背が低く，みばえ悪く，陽気なだけで，知性・教養といったものに無縁で，彼女の条件を全く満たしていませんでしたが，少年のような顔立ちで，睫は女の子のように甘く，しなやかで，顔の中に，何か人を惹きつける力がありました。要するにビビッときたわけです。だからといって結婚はできませんでした。条件を満たしていないからです。

人間には誰にでも，内面に潜む欲望と，世間体を気にして生きる二面性がありますが，彼女にも当然この二面性がありました。彼女の中にも，天使と悪魔が同居していたのです。彼女は，自分の中の原初の欲望を，人間の命令に従わず，自由に行動する猫に例えています。彼女は，人間を平然と欺く猫を，ジキル博士とハイド氏にみたて，賞賛しています。猫は姿を変えたモンゴメリであり，彼女の欲望の象徴でした。しかし，彼女は，自分の中の原初の欲望を感じたにもかかわらず，それよりも世間の目に映る自分の姿に配慮することを最優先させます。このように，彼女を強く縛っていたものを一言でいうと，ヴィクトリア時代の特徴であるレスペクタビリティ[8]（respectability）であると，小倉千加子氏は『赤毛のアンの秘密』の中で指摘されています。respectability という英語は，「世間体」とか「尊敬に値すること」とか訳されます。原初の欲望から自分を見失い，ハーマンにのめり込みましたが，レスペクタビリティを大切にするモンゴメリはハーマンとは結婚できません。エドウィンはレスペクタビリティは満たしましたが，激情がわかなかったのです。

そうした中，マクニール家の祖父が亡くなり，祖母が一人残されたため，祖母の面倒を見ることを理由に，ハーマンと別れ，教師も辞めてキャベンディッシュに戻ります。祖母と暮らしながら小説を書き，カナダ，アメリカの雑誌に投稿する日々を３年間送ります。自宅に併設された郵便局の取り扱いもしました。1899年には，小説家として100ドルの収入を得たと，1900年の日記に書いています。現在の100万円くらいに相当します。

1901年～02年，彼女は祖母の世話を従兄弟に頼み，ハリファックスの夕刊紙「デイリー・エコー」の校正者，社交欄の記者になります。この間に書いた創作の多くは，お金目当ての児童向け短編小説が主で，新聞社や雑誌社が求める道徳の入ったものばかりで，彼女としては，不本意な執筆でした。書きたいものが書けない！このジレンマは後々までモンゴメリを苦しめることになります。

島に帰ったモンゴメリは，キャベンディッシュの長老派の教会で，日曜学校の指導とオルガン演奏をしました。この頃から，長い間の希望であり，野望でもあった長編小説を書くことを考えます。いつもノートを持ち歩き，思いついたアイデアを書きとめました。以前書き留めておいたメモを読み返し，閃きがおこります。「年寄りの夫婦が手伝いの少年を孤児院に依頼するが，手違いで女の子が送られてくる」。こうして1906年（31歳）に，『赤

毛のアン』が完成します。しかし，５つの出版社に送りましたが，全て送り返されてきました。その一方で，そこに赴任したユーアン・マクドナルド牧師と1906年に婚約します。この頃の彼女の原稿料は年間500ドルくらいで，彼女は，原稿料で生計を立てることができたカナダ初の女性作家といわれています。

『赤毛のアン』を完成させてから２年ほど経って，探し物をしている時に，もう一度それに目を通してみたら，そんなに悪くないと再び思い，もう一度書き直して，ボストンのペイジ社に送ります。またボツになるところでしたが，編集者に島出身の人がいて，推してくれたので，出版の運びとなりました。1908年６月のことです。出版されるや，アメリカ，カナダ，イギリスでベストセラーになりました。世界中からファンレターがきたり，彼女に会いにくる旅行者に手をやきます。彼女の成功と報酬への人々の嫉妬もありました。人気作家になっても祖母との二人暮らしは変わりませんでしたが，1911年に祖母が亡くなり，この家は祖父の遺言で祖母の死後はおじが相続することになっていたので，彼女はこの家を出ていかなければならなくなり，ユーアンと結婚という形でこの家を出ていきます。モンゴメリ36歳，ユーアン39歳でした。この結婚は，ユーアンを愛していたからではなく，知的レベルや家柄の釣り合いを考えた実際的な結婚でした。結婚式前夜，夢を失ったことに泣き崩れます。式が終わると，恐ろしい絶望に襲われました。何の希望もない囚人になったような気がしたのです。自由になりたい！しかしもう遅い！しかし彼女は，この憂鬱を征服し，なだめすかして心の奥深くに埋めて，新婚旅行へでかけました。船で大西洋を渡り，祖国スコットランドのグラスゴーから上陸し，イングランドへ，２ヶ月かけて南北縦断しています。

新婚生活は夫の赴任地，オンタリオ州リースクデイル村で始まりました。ここは，トロント北東の農村地帯です。彼女は，牧師夫人として献身的に手伝いました。ここで彼女は36歳～52歳までを過ごしています。その間に，長男チェスター・キャメロン，次男ヒュー，三男スチュアートを産みましたが，ヒューは生まれたその日に死亡しました。また，夫の鬱病がひどくなり，泣き出したり，家を飛び出したりと，心労から彼女は不眠症になります。他の人達にさとられないよう心をくだきました。

夫の鬱病の原因は，妻の態度によるものだという説を小倉千加子氏は展開されています。モンゴメリが夫を選んだ要素は６つあります。①スコットランド系の出自であること。②宗教が長老派であること。③ダルハウジ大学卒という学歴。④牧師という職業についていること。⑤４歳年上という年齢差。⑥平均以上の容貌をもっていること。しかし夫には，ハーマンのような強烈な肉体的魅力はなく，愛することができませんでした。結婚前から彼女には，夫への諦念と，自分の方が上という思い上がりがありました。夫の鬱病は，この妻の態度によって作り出されたものだと小倉氏は考えます。では，結婚相手が違っていたら，彼女は満足できたのでしょうか。精神分析家のカレン・ホーナイは，「結婚生活の障害の大部分は，我々自身の発達の結果であり，我々自身が持ち込んだもの」と言っています。つまり，夫の鬱病の原因はモンゴメリ自身にあったということです。そのことに彼女は気づいていましたが，それを克服することはできなかったのです。これは，私達も経験することではないでしょうか。こうすればいいのにとわかっていてもできない面が私達にもあると思います。

1926年，夫の転勤によりトロント郊外の

ノーヴァルの牧師館に移ります。この家に約10年暮らし，『エミリーの求めるもの』，『銀の森のパット』等が出版されましたが，夫の心の病気は年々重くなり，彼女も苦悩を深めていきます。作家になってからの日記はモンゴメリの遺言で50年後（1992年）に発行されました。そのおかげで，彼女の実像が見えてくるようになりました。作家として，牧師夫人として多忙を極めたこと，得心のいかない作品を書かなければならない苛立ち，出版社との訴訟問題，夫の鬱病を隠し続ける苦痛，キリスト教への懐疑，等々です。彼女は，魂の生まれ変わりを認めないキリスト教の教義に疑問を持っていました。彼女は，死と生はつながっていて，断絶したものではないという非キリスト教的死生観を持っていましたし，自殺も肯定していました。生命は押し付けられたもので，望んだものではなく，耐え難くなったら放棄する権利があると考えていました。

1935年，夫が健康上の理由で牧師を引退し，トロント市内に転居します。そこで購入した家に「旅路の果て荘」という名前をつけ，この家で第４巻『アンの幸福』と第６巻『炉辺荘のアン』を書き，1942年４月24日，67歳で亡くなります。小倉千加子氏は，トランキライザーの飲み過ぎによる自殺説をとっておられますが，松本侑子氏は確証が得られていないと否定的です。トロント公共図書館のモンゴメリ研究家の梶原由佳氏は，脳卒中あるいは脳溢血説をとっておられます。モンゴメリの晩年は悲観的要素が多くあったことは事実です。健康に恵まれず，インフルエンザ，神経衰弱，扁桃腺炎，不眠症，胃腸障害，等々で苦しんでいましたし，夫の看病もありました。それに，第二次世界大戦が始まり，彼女の精神状態も夫の容態も悪化するばかりでした。自殺してもおかしくない情況でしたので，ファンとしては自殺であってほしくない一方，そうした情況を考えると自殺もやむをえなかったかな，といろいろ考えますが，松本氏が言っておられるように，まだ確証はありませんし，梶原氏が言っておられるように病死だったのかもしれません。今のところまだ藪の中状態です。本人と神様にはわかっているのですが。

９．『赤毛のアン』の人気の秘密

1979年（昭和54年）は，『赤毛のアン』出版70周年で，記念行事がいろいろありました。アニメ『赤毛のアン』がテレビ放送されましたし，「日本児童文学」における「なぜ今，『赤毛のアン』なのか」をテーマにした座談会もありました。その座談会の内容を要約して，『赤毛のアン』がどのように見られていたのかを紹介し[9]，本報告を終わりにしたいと思います。

この座談会では，アンの空想癖はアンの魅力の原点だが，アンを空想派の少女として際立たせるために，他の登場人物が画一的に描かれているとか，アンの空想が現実を凌駕するまでには発展させられていないといった批判もありましたが，本報告では，そこで語られた『アン』の人気の理由だけに絞って紹介したいと思います。

〈人気の理由〉１

①　『ハイジ』（ヨハンナ・スピリ，1880）や『パレアナ』（ポーター，1913）といった女性主人公と並んで，孤児でありながら，天真爛漫なキャラクターの持ち主として描かれていることで，読者を惹きつけていること。

②　『アン』だけが抜きん出て日本の子供達に読まれるのは，他の子供達にはない，そばかすだらけで赤毛という身体的劣等感を持っている点。読者は同一性を見出しやすく，親近感が沸く。

〈人気の理由〉 2

①猪熊葉子説

・少女達は，家庭や学校の枠の中に入れられているので，始終枠からはみ出るアンに自分達の理想を見ているから。

・アンは絶えず何かと闘っていて，しかもそれに勝っている点。そしてその勝利が，アンのやさしさ，克己心，努力からもたらされている点。

②横川寿美子説

・保守的な内容だから。

・アンは闘って自分のほしいものを手に入れていく。

　家族，友，服，容姿，教養，自活できる力，将来の恋人等々。

・しかし，それらを手に入れるのに，強い自己主張や，言い争いや，誰かを傷つけることはない。努力はしたが画策はしていない。その努力さえマシューのため。一見勝気で自己主張が強く見えるアンだが，激しい主張や圧力への反発をしないでもいいように書いてある。学校での孤児へのいじめもないし学校へ行くことへのマリラの反対もない。

・アンは自分をさらけだすこともなく，自分の深部を覗き見ることもなく，選ばれた道を行く。だから，アンの世界には葛藤もなく，ギルバートの気持ちも予め読者に知らされているので，緊張感もない。

・社会の保守層から見て，安全な読み物になっている。

・アンは家庭や学校の枠にはまらず，保守的文化と闘って自分のほしいものを手に入れていくようにみえながら，従来の文化から一歩も出ていない。

・『アン』は，ハラハラさせながらも，結局は安全な場所に着地する少女の成長物語。

〈人気の理由〉 3

＊アンの持つ，秩序破壊者の魅力

＊『アン』の名場面６つがそれを示している。

①リンド夫人を罵倒する場面。

②ギルバートを石版でたたく場面。

③ダイアナに黄苺水と間違えて，ぶどう酒を飲ませ，彼女を酔わせてしまう場面。

④屋根の上を歩き，転落して骨折する場面。

⑤髪を黒く染めようとして，緑色になってしまう場面。

⑥エレーン姫の役をやった時の舟の浸水場面。

＊これらは全て，ジェンダーの逸脱に関わっていて，同時にピューリタン的禁欲主義への反発やヴィクトリア朝の理想的女性像への諷刺の主題も兼ねていて，マーク・トゥエインは『アン』を諷刺文学として絶賛している。

終わりに

『赤毛のアン』は，マーク・トゥエインが「諷刺文学」として絶賛しているように，ディテイルの中ではアンを生き生きとした，生命力のある，当時の文学的正統を転覆させる実体として描くことに成功していますが，最終的には当時の伝統的な女性の生き方で終わらせています。この，部分と全体が指し示す方向性の矛盾が『赤毛のアン』の評価を分裂させています。

この矛盾は，モンゴメリ自身の二重性からきていると思います。「モンゴメリの人生」でみたように，彼女は，作家として成功するためにも，一人の女性として世間から非難されないためにも，世間に気に入られるものしか書けませんでした。ギリシャ神話に出てくるダフネやアンティゴネやプレアデス姉妹とか，イプセンの『人形の家』のノラのように，時代を超えて自分を貫いた人の例はありますが，これを実行することは至難の業です。作

品においても，彼女自身の人生においても，このことで生涯苦しみ続け，不満を抱いたままモンゴメリは去っていきました。しかし，モンゴメリにこのジレンマ，葛藤があったからこそ，『赤毛のアン』というキラッと光るものが残せたともいえるのではないでしょうか。私はこのモンゴメリの遺産を大切にしていきたいと思っています。

引用・参考文献

引用

1）松本侑子著『赤毛のアンへの旅』，（NHK出版，2008），pp. 140–41.

2）松本侑子訳『赤毛のアン』，（集英社，2008），p. 396.

3）松本侑子著『赤毛のアンに隠されたシェクスピア』，（集英社，2008），pp. 115–16.

4）松本侑子訳『赤毛のアン』，pp. 453–54.

5）松本侑子著『誰も知らない「赤毛のアン」』，（集英社，2008），pp. 69–95.

6）松本侑子著『誰も知らない「赤毛のアン」』，pp. 28–39.

7）松本侑子著『赤毛のアンへの旅』，pp. 96–100.

8）小倉千加子著『「赤毛のアン」の秘密』，（岩波書店，2004），p. 155.

9）小倉千加子著『「赤毛のアン」の秘密』，pp. 109–140.

参考文献

1）L.M.. Montgomery, *Anne of Green Gables*, Puffin Classics, 1994

2）松本侑子訳『赤毛のアン』，集英社，2008

3）松本侑子訳『アンの青春』，集英社，2008

4）松本侑子訳『アンの愛情』，集英社，2008

5）松本侑子著『赤毛のアンへの旅』，NHK出版，2008

6）松本侑子著『誰も知らない「赤毛のアン」』，集英社，2008

7）松本侑子著『赤毛のアンに隠されたシェイクスピア』，集英社，2008

8）小倉千加子著『赤毛のアンの秘密』，岩波書店，2004

9）山本史郎訳『完全版・赤毛のアン』，原書房，1999

10）村岡花子訳『アン・シリーズ』（赤毛のアン誕生100年記念刊行），新潮文庫，2008

11）NHKテレビ『3カ月トピック英会話：『赤毛のアン』への旅』，日本放送出版，2008